

銀友

本郷学園
同窓会誌

平成15年6月1日
第32号



❧ 総会のお知らせ ❧

日時 平成15年6月21日 15:00より

場所 本郷学園会議室

(懇親会は17:00より)

銀友三十二号 目次 平成十五年六月一日

会長挨拶……………	村松 達夫 1	平成十四年度定期総会報告……………	栗原廣太郎 20
本郷中学・高等学校校長挨拶……………	高橋 雄 2	学園だより……………	22
本郷の先生たち……………	平田 満男 3	平成十四年度事業報告・収支報告……………	24
校友を訪ねて 亀井忠雄氏インタビュー……………	5	平成十五年度事業計画・収支予算……………	25
染井能楽堂の思い出……………	高野 正美 10	会費納入者一覧……………	26
坪内逍遙先生と演劇博物館……………	長崎 一 12	本郷学園同窓会会則……………	30
文化祭報告……………	田中 良一 14	追悼……………	32
同期の輪……………	15	事務局よりのお願い・編集後記……………	33

ご挨拶

同窓会会長 村松達夫 (中十七回)



今年も私共同窓会は去る三月十五日の卒業式に、三六一名の新入会員を迎えることができました。ご同慶の至りに思います。

二十一世紀に入って三年、世事は碌でもないことばかり。デフレ、倒産、リストラと景気は益々低迷を続け、九・一一からアフガン戦争、九・一七から俄然顕在化した北朝鮮問題、そしてイラク戦争と、負の遺産に追い討ちをかけられて、何とも嘆かわしく遣り切れない、閉塞状態ではありませんか。

それでも時の流れは容赦なく、母校本郷学園は創立八十周年を迎え、わが同窓会も、創設七十五年になります。今、手元の本郷学園六十年史を開くと、同窓会草創期、昭和シンドルの時代に、色々問題を抱えていたよう

ですが、それでも年二回、春秋に総会が開かれていたようです。

昭和十二年六月、同窓会十周年行事が行われた前後には、当時未だ二十代の若かりし大先輩方の間に、同窓会館建設が建議されていたとあります。

また昭和三十七年の同窓会三十五周年記念に、初めて同窓会名簿が発刊されていますが、六十年史によれば、これは昭和三十一年から同窓会長を努められた、第一回卒業生の新栄先輩が、独り電話とハガキで六年有半にわたり、同窓生一人ひとりの消息を訪ねられた碧血碑とあります。これら、ひたむきな同窓生への思いに、唯々低頭驚嘆するばかりです。

それに引き替え、会長就任三年目を迎えて只管慚愧するの外ありません。今私共にある課題は、例年のことですが、同窓会費の増収と、それによって銀友を増刊

し、同窓生間そして学園との連携を、一層密にしたいと努めてまいります。

会員各位には、毎度お願いしておりますように、夫々の卒業回期でのクラス会を活性化して、同期会毎で名簿を整備して付帯する、より多くの情報を組込めれば、今日的には同窓会名簿は、それで良ししなければならぬと思っております。

また各位が、クラス会等で集まれた時は同窓会の将来について、その在り方を是非討論して下さい。折に触れ、その模様を事務局へご一報下されれば幸いです。

今年も九月には母校に体育祭(十三日)、本郷祭(二十七、八日)が繰り展げられます。殊に例年の文化祭が今年から本郷祭としてわが同窓会も学園のブースを借りて出展しますので、内容は是非(皆さんからの)提案を歓迎)は兎も角、同窓会員皆さんの溜り場としてお越し下されば賑いも一入かと思えます。

皆さんの一尽のご支援ご協力をお願いいたします。

ご挨拶



本郷中学・高等学校校長

高橋

たけし
雄

同窓会の皆様には、日頃母校のためにご支援・ご指導を頂きまして誠にありがとうございます。

本郷は創立八十二周年を迎えて、さらなる飛躍をと考えています。それには、同窓会の皆様のご協力を頂くことも多々あると思います。その節はよろしくお願い致します。

今年度は新入生として、中学二六四名、高校二八七名が入学してきました。新入生は、本郷へ夢と希望に胸を膨らませながら入学してきたことと思います。新入生が抱いた夢と希望を卒業まで持ち続けられるように、教職員が一丸となって指導していく必要があります。我々教職員は、どうすれば生徒の希望を叶えることが出来るかを真剣に考えてきました。そして、平成十五年度の教育改革を、生徒の意識改革に重点を置いて考えました。まず、平成十四年に行った授業五日制、学校六日制を止めて、平常の六日制に戻しました。変更した大きな理由は、

生徒が疲れて家庭学習ができないことにあります。一週間のうち三日が七時間授業で、その後にはクラブ活動になり、疲労が蓄積して家庭学習の余裕がなくなっていましたからです。従って、生徒が無理なく予習・授業・復習が出来るように、環境を整える必要があったからです。

さて、これからの日本を背負う若者を育てることが、本郷の教育の柱と考えます。今の世の中は、先が見えない状態だと言われています。こういう世の中だからこそ本郷の卒業生が活躍出来るように、在校生を教育する必要があると思います。そこで、今年度は次のことを教育目標にしました。

一、勉強は、教わるのではなく、自ら学ぶものである。自ら学ぶには、目標をたてて一生懸命努力することである。将来、何をやるのかを早い時期に決めておく。二、人間としてどう生きるか。をみんなて話し合い、お互いの考えを尊重しながら大人の意見も聞き、「強く生きる力」を養うこと。ホームルームの活用。三、自分のことは、自分でやる習慣をつけさせる。

これは、簡単なことではあるが、なかなか出来ない。せめて、基本的な生活習慣をきちんとつけさせる。このことは、「思いやりのある人」つまり「礼儀正しく人の意見を聞く人」であることを身につけさせる。四、時間を大切に作る習慣をつける。人と接するとき、一方的な時間設定をすることは許されない。始業時間やクラブ活動の時間をきちんと守らせる。今年度の大学合格実績は、国公立大学の合格者数が減りましたが、早稲田、慶応、上智の合格者数は昨年より増えました。一生懸命やる生徒が、力を出した結果と考えます。これらの生徒は、目的を持ち、それに向かって努力したからです。このように、目的意識を持つ生徒が沢山出てくれば、自然に大学合格実績も上がります。

今年度は、生徒の心の教育を大切にしていくため、講演会などをより多く計画していますので、同窓の皆様にも講演をお願いすることもあるかと思えます。その節はよろしくお願い致します。

最後に、本郷学園がますます栄えて行くためにも同窓会の皆様のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い致します。

本郷の先生たち 第二回

石井光和先生

平田満男(高七回)



石井光和先生

もう十年ほど前になるだろうか。高校七回卒業生数名で、高校三年のときの担任の先生を福島の磐梯熱海温泉におまねきし

て、旧師謝恩の一夜をすごしたことがあった。

おいでいただいたのは石井光和、板倉勝高、植竹恒男の三先生で、板倉先生は東北大学、植竹先生は亜細亜大学の教授になっていて、本郷にとどまっているのは石井先生だけになっていました。先生たちに見れば、もう何十年も前にわかれて別の道をすすみ、それぞれが教育・研究の分野で一家をなしているわけで、同業であるとはいえ、昔の生徒たちからまとめて「恩師」あつかいされるのは、

いささか迷惑なところもあるのではないかという気がしないでもなかった。けれども、温泉にはいつて浴衣で宴席にならぶと、板倉先生も植竹先生も、もうぼくたちの「本郷の先生」にかえってしまったているのが、とてもうれしかった。そして、ここに石井先生がいなかったら、こういう雰囲気になるまでに、もう少し時間がかかったのではないかという思いがした。

この文章をかくために石井先生からいただいた年譜によると、先生は昭和二年八月に「本郷、白山にうまれる」となっている。そのあとお住まいは蒲田にうつり、敗戦の年の三月に東京市立蒲田工業学校（これは、五年制の旧制中学）を卒業して、日本精工株式会社多摩川工場でベアリングをつくられていた。昭和二十四年に新制の東京理科大学理学部物理学科に入学して、「国鉄や私鉄のゲージの仕事

をしていた」父親の手伝いをしながら大学にかよって理科と数学の教員免許をとり、昭和二十八年に理科大を卒業してすぐに本郷の数学の教員になっている。石井先生は努力の人、苦学力行の人なのだ。

どうして、本郷の先生になったのか。

「この理事に知り合いがいて、教育実習を本郷でさせてもらった。そうしたら大学を卒業する年の一月に、本郷から千葉の県立高校へ移る人がいてね、そのあとをうめる臨時講師をやらされて、そのまま四月から教諭になったんです」

先生の経歴のすごいのは、ここからだ。昭和二十八年四月に「本郷学園に教諭として就職」してから、平成四年三月に「本郷学園の定年六十五歳で教諭としての勤務終了」まで、その間の四十年のあいだ、何の記載もないのである。まったくの空白なのだ。つまり石井

先生は、この四十年間よその学校で教えることなく、ひたすら本郷の生徒の面倒をみてきたのである。

「本郷に骨を埋めます」などとかっこいい事を言っていないながら、じつは教師として力がないために、どこからお呼びがかからないという人もいる。石井先生はそうではなかった。たとえば工業高校の全盛期に、都立の有力な高校に移らないかという話があった。でも、先生はそこに行かなかった。なぜか。

「親がだめだつて言うのさ。ほかの学校にわかるのは、うちの息子を卒業させてからにしてこれて言うんだ」

これが、石井先生の真骨頂なのだ。生徒に慕われ、親（そのころは、父親が多かった）に頼りにされて、簡単に本郷からうごくことができなくなってしまうのである。

先生は昭和三十三年に卒業することになる中学の一学級四五名の担任をしていた。その三年後には本郷中学が新入生の募集停止に追いこまれることになる、土壇場に近い学

年である。中学三年の夏休み前に親たちがあ

つまって、息子たちにもつと学力をつけてくれとと言う。このまま本郷高校に進学するのは先が思いやられるから、そのころ人気が高かった私立大学の付属高校を受験させたいと考えているのである。いくらその頃の本郷でも、おおっぴらにそんな補習がやれるものではない。そこで先生は、もちろん当時の内山校長には無断で、群馬県四万温泉に希望者をあつめて、夏休み中二週間の学力強化合宿をすることにした。

講師も、本郷の教員を使うわけにはいかなかった。そこで石井先生と弟さん（理科大の学生）が数学と理科と社会をおしえ、ほかが英語と国語をうけもった。朝から晩まで、まずい三度の食事とカリントウのおやつ、夕食のあと、のランプの時間のほかは、ガンガン勉強する。そのかいあつてか、参加者のほとんど全員が立教、中大杉並、明大中野などに合格した。本郷の先生が本郷の生徒に、他校進学のための講習をする。やつてはいけなはずの

ことでも、目の前にいる生徒の将来を考え、親に泣きつかれれば、やらざるをえない。それが、どん底の時代の本郷の実状だったのである。

そんな思いをしてきた先生だから、本郷でやった一番いい仕事は何か、という質問には「中学の募集再開ですね。それと、新しい本中一期生の教育。本中に一生懸命だったよ」

という答が、打てばひびくように返ってきた。中学入試の責任者だったから、先代の松平校長と進学塾まわりをして、本郷中学を受験させてくださいと頼んでまわったという。

「松平さんは、自分が校長をしている間に中学を再開しなければと、必死だったんだよ」

これは、松平先生だけではなく、石井先生もまったく同じ気持ちだったに違いないと思わせる一言だった。

校友を訪ねて

亀井忠雄氏（高校12回生）人間国宝に認定される

駒込、染井通りを学園に向かうとゴルフ練習場があります。このあたりに昭和四十年まで染井能楽堂がありました。この舞台、そもそもは明治八年旧加賀藩主前田斉泰公の自邸に建てられた能舞台で、「根岸能舞台」と呼

亀井忠雄氏



人間国宝に認定される

ばれました。大正八年、松平頼壽伯（本郷学園創設者）が譲り受け、染井の地に移築しました。第二次大戦で東京の能舞台は被害を受け、残ったのはたった四つ、その一つが「染井能舞台」です。染井の地は地の利も良く、昭和二十〜三十年代、各流派の錚々たる方々が染井で舞ったそうです。能楽再興の殿堂として、隆盛を極めた染井能舞台でしたが、昭和三十年代に入り、舞台は老朽化も激しく昭和四十年解体されました。その後、部材は保管されていましたが、横浜市に寄贈され平成八年、部材の大部分を使用して「横浜能楽堂」としてオープン致しました。

そんな能楽師の一人で、この度、重要無形文化財保持者に認定された、亀井忠雄氏をインタビュー致しました。

亀井忠雄氏プロフィール

亀井氏は高校十二回生（昭和三十五年卒業）能囃子方大鼓 葛野流宗家預かり

人間国宝の父ら葛野流の名人三名から技法を習得、伝承者養成の講師として後継者の指導にあたり振興に尽くしている。また、兄、俊一氏（高校十回生）は幸流小鼓、弟、保雄氏は（高校十四回生）宝生流シテ、ともに本校の卒業生で能関係の仕事に従事している。

インタビュー

平成十四年十一月九日 東中野 梅若能楽学院会館にて

本誌：この度の『重要無形文化財保持者』（人間国宝）の認定を受けられましたこと、心からお祝い申し上げます。

亀井：有難うございます。

本誌：ところで、本郷中学にお入りになったのは何かきっかけがござりますか。

亀井：日本の敗戦により多くの能舞台が失われ、また後援者を失った能楽の世界では、

このままでは能楽が衰退しようということ
で、能の各分野の師弟を集めて芸を伝える
ための稽古をつける事にしたんですが、そ
の稽古場が戦火を免れた柴井の能楽堂だっ
たんです。そこで兄もそうですが、本郷中
学なら授業が終わればすぐ稽古場にいける
ということ、入学したわけですよ。

本誌：囃子方の家柄に生まれて、幼少の頃か
ら修行されてこられたそうですが、若い頃
から大鼓一筋でいいこうと考えたのですか。

亀井：私がこれをやろうと思ったのは、もう
小学三年の頃です。やっぱ親父の姿、舞台
姿を見てますとね、素敵なんです。迷い
はなかったですね。だから修行がづらいと
かそういうことは思ったことが無いです。
その代わり学校へ行っても英語の本は裏返
してね、何をしているかという、自分の
今晚の稽古をしているわけですからね、そ
の、稽古のほうに恐いですからね。(笑い)
その当時の学校ですから、適当に許して
くれましたよ、また舞台があるとやっぱり

休みますもんでね、母は一、二度呼ばれて
「如何ですか」なんて言われたこともある
らしいですけどね

本誌：中学生の頃から舞台に。

亀井：もう小学生の頃から、だから中学のと
きはいっぱしの事をやってるわけですよ
本誌：能の囃子は、伴奏ではなく協奏という
風に言われているようで、時に即興もある
ようですが、指揮者もおられないし、シテ
の方との呼吸あわせは、どのようにしてい
るのですか。

亀井：ご存じの方はおられると思うんですけ
れども、瞬間に見分けることが出来ない。
今日はこの人こうやりたいんだとか、こ
う行きたいんだとか、でも俺はこうや
るよ、というようにね、みんなそれぞれ、
やってる最中に話し合いが出来る、話し合
いて話はしませんよ、チョンだとか、ポ
ンだとか、テンとか、ヒーとか吹いている
訳ですからね。それで持っていてけるレベル
の人たちとやっていると、やっぱり最高にお

もしれいんですよ。

全世界、だいたい行きましたけれどもね、
やっぱり近頃は、すごく持て囃されるん
です。例えばニューヨークへ行っても、
ニューヨークフィルの何とかという指揮者
が、マーベラスというんですよ、マーベ
ラスって言葉分かんないんですよ、英語だ
し、(笑い)そしたら通訳がこんな言葉い
ただきました、すごいんですよって、ヨー
ロッパへ行ってもオペラをやってる方たち
は、音楽の、いわゆる向こうの音楽の方達
でもね、まず質問はここに来んですよ。

やっぱりあの「音」と「掛け声」と「間」何と
も言えない、そういう方はすぐお分かりに
なるらしくてね。「これは何だって」ま
あそれ説明するのは、能は音がたかだか八
つにしか割れないんですけれどね、それ
もね、それを巧い具合にこうやって組み合
わせて、それが、こういうエスカレーター
じゃあないんですよ、エスカレーターは
すーっと同じ間隔でこういくでしょ、とこ

ろが、これはこう行ったり、こう行ったり、
(行きつ戻りつ)するもんですから、説明
が大変です。

本誌：ところで、道具を大切に、当然だ
と思いますが、大鼓は長時間使用した物の
方が音に風合いが出ると聞きますが。

亀井：いや、あのね、鼓に関しては、馬の皮
なんですけれどもね消耗品なんです。そ
ういうの作る人がいますとね、二、三十組
か買うわけですが、使えるのが三、四組あ
ればいい方です。ちゃんとした音が出るの
が。大鼓というのはね生の皮をこんど火鉢
の傍で一時間ばかりおいて、それをま
たこうやって締め上げましてね。

本誌：能を、講演する場合に何人ぐらいのス
タッフが必要なんですか。

亀井：うーん、あのね、それはその時の出
し物にもよりますし、それから、一日に二
番やるとか三番やるとか、一番でも良い時
とかと言う、あれが違いますでしょ、そう
するとやっぱり人数も、だから一番で、そ

れから狂言も付けてという、まあ狂言が
三、四人ですよ、囃子方が八人の二人で
十人、シテが十五人、まあツレがいて十六
人ワキが一人いてワキツレがいて、やっぱ
り二十人近くは。それで皆これ単独です
から。チームになつて居るのはシテ方、例え
ばここ梅若さん、これはシテ方だけのチー
ムですね。それから、観世さんでも宗家の
方のチームと分家の方のチームとがあり
こういうチームと色々な組合せでできるん
です。

本誌：最近、狂言にしても、色々愛好者が
増えているようですが、今後の底辺拡大と
後継者の育成とか、先ほど言われた、戦後
の、亀井さん達が染井でやった様な事とい
うのは、現在どのようにされているので
すか。

亀井：現在、国立という所で、三役の養成を
行っています、そこへ我々が向かまして
月に十回〜十五回お願いしますと言われま
すと、倅と二人でこなしています。専門で

それになりたいと言うのが、そこに申し込
んで来て、まあ審査をして、「十年食えな
いよ」から始まるんですけれどもね。何処
の世界でも同じでしょうけれども、十年本
当に食えないんですよ。

本誌：そうすると、今はまるっきりの素人の
方が、能の世界に入つて来るケースも結構
いらつしやるんですか。

亀井：随分いますよ。この十数年、国も養成
してますしね。それから、飛び込みで来て
書生さんやって、まあ、三役の場合、後継
者を国がバックアップしてますからね。

本誌：三役と言いますと。

亀井：ワキ、狂言と囃子。シテは、そんな事
しなくても、人数は大体いますから。三役
は、なかなかその一人前になって飯が食
えるまで大変なんです。

本誌：生徒、特に中学、高校生対象に能の鑑
賞会など行っていますか。

亀井：今までは洋楽一遍倒だったのが、この
二十年位前から、日本の方針も変わってき

たんですよ。日本のものも子供達に教えようと。能の方もそういう立場から、今協会の若い連中が一生懸命、例えば本郷へ行って、囃子はこういう物であるとか、能ってこんな様なもんだよとか、奉仕同然で行くようなシステムが、今だんだんなりつつある。だから、それはもうその底辺といいですか、まず、先生が能を見たことがないですよ、だから、その方達がこの頃はよく能楽堂へお見えになるそうです。レクチャーみたいなのを頼まれて行くようです。また、インターネットで歌舞伎とか能を簡単に見られるようになってるんですけどね。(笑い)だから、そういう意味ではね、今までのような一辺倒の、百年ちよつと前の教育からようやくこの二三年前から、だんだんそういう風になってきて、ただ一遍には変わりませんよねそりゃ、当然無理ですから。

本誌：新しい指導要綱で、中学校の先生方が今一生懸命、琴や三味線やらを習おうとい

う動きがあるようですよ。
亀井：お琴はたぶん一番普及するんじゃないでしょうか。楽器そのものがありますし、旋律がございましてしょ、だからそういう意味では残るでしょうし、最初に復旧するでしょうね。と、いうことは前から言われていきますし。

本誌：御自身の大鼓に対する技術的、体力的に最高の時期はいつ頃と思われませんか。

亀井：しょっちゅう言われるんですけどもね、子供は子供で良いんですね。で、大人も良いんですね。でもね、オールマイティね、お能は、五番有ります、神の物、戦の物、女の物、雑の物、鬼の物とこれを全部打ち分けられるのが名人です。私が十八歳の時、親父が同じもの(人間国宝)を戴いたんですよ、親父はもう雲の上の人でしたからね、この方について行けば、自分が六十歳になった時に、ここに行けるかもしれない、芸の位ですよ、もしかしたらいけるかもしれない、というようなことも考えてい

ましたね。やっぱり体力気力全部なきやあだめですからね。四十から六十五歳くらいかね。

本誌：今、息子さんの広忠氏が、新作能の方で活躍されているようですけど。

亀井：本人が出来なきや、そういう物もさせてもくれませんか、こつちが出来ないと。これはだから相当頑張れと、本人も頑張りましたね、だから下の二人も歌舞伎の世界にいますけどね。まあ母親と両方でしたんですけどもね。そういう親の姿が見せられる親に、やっぱり成りたかつたんですよ、私も親の背中をずっと見てましたからね。最近世の中が悪い、いろんな事おっしやられる方がいますけど、それじゃあ親としての責任をね、本当になさってればそういう時代というのは、絶対に無いと思うんですよ。やっぱり子供は五歳十歳頃までに「ありがとう」ございました「今日は」「さようなら」というのがちゃんと出来ていれば、もうこれ行くと思うんですよ。人

間としてね。…と、思っているんです。(笑い)

本誌：亀井さんの家では親の躰だと、

亀井：いや、躰といえますよ、

本誌：亀井家は自然にそういう家庭だったという

亀井：うんまあそうかもしれませんけれどもね、例えば、まだ小学生の頃、人様のお屋敷に連れて行かれますよね、必ずお供でそういう、いろんなお家へ長逗留をして、四(五)日いるとか、もつと居る時もあるんですよ。その時代ですよ、今はそんなこととほごいませんけれど、例えばお風呂をいただくにしてもですね、親は、先に全部洗いです、お湯をかぶって入らないといけない、人の家のお風呂だから子供がはいると汚いからってね、(笑い)そういう事これが結局教えなんだなと思いますね。

松平頼壽先生が、趣味で大鼓をやったんですよ、その先生ね、私の先生でもあるけれど、その先生のお屋敷にお稽古に行

くと、半ズボンはいってくるな、着物を着てこい、小学校三年生にね。で、お袋も親父も子供の着物を着せて、小学生だと半ズボン、稽古すると汗かくでしょ、すると畳が濡れる、ああ、昔の人はそういうことまで気を使って行動したんだなと。

本誌：いろいろ興味深いお話、有難うございました。これから益々のご活躍、ご期待申し上げます。

レポート

高野 正美 (中学17回)

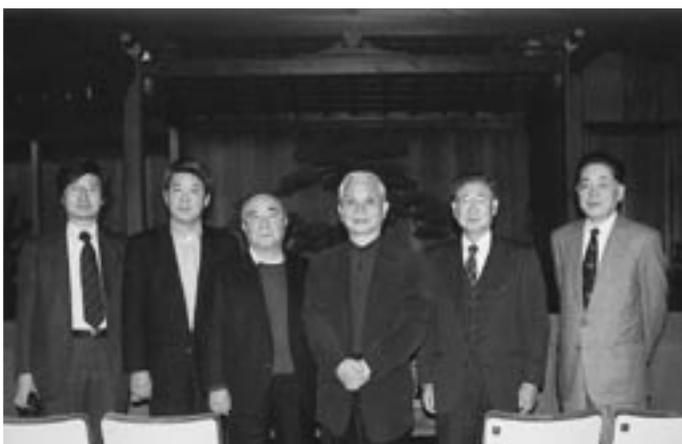
山内 英夫 (高校3回)

市倉 洋一 (高校12回)

関塚 正治 (高校20回)

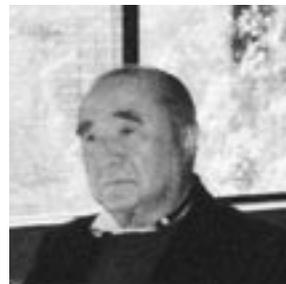
写真

寺田 正美 (高校24回)



染井能楽堂の思い出

高野正美(中七回)



私が本郷中学に在学した昭和十四年～十九年当時は校長松平頼壽伯郎のお庭に入る事が出来たのは、卒業写真を撮る時だけでした。ですから五年間に一回のみ、立派なお屋敷をバックに集合写真を写した思い出がありますが、染井能楽堂の建物そのものについては、在学中には思い出としてはございません。

私が昭和二十五年に結婚し小石川戸崎町(今の白山二丁目)に所帯を持ったときに、近所の方から謡曲の稽古を熱心に勧められ、宝生流の謡曲・仕舞を習い、その関係で染井能楽堂を使わせて頂いた事があるので、その

思い出を書いてみたら、との、事務局からのお話をお受けし、五十年前の記憶を辿って書き始めた次第です。

さて、皆さんもご存じの通り、習い事には必ずと云っていい程、発表会がありますように、当時、私どもの会でも春秋二回、近所の料亭や会館などで、大会を開いておりました。偶には本式の能楽堂で大会をしたいと、師匠の発案で、染井の能楽堂をお借りしました。多分昭和二十年代後半に、一～二回お借りしたと記憶しております。舞台使用料は如何程か存じませんが、特に高かったと言う記憶は有りません。

当時はまだ戦後間もないため、能楽堂も少ないので、焼け残った染井能楽堂などがよく利用されており、プロの方の定期公演も行っておりました。

染井能楽堂は広い松平さんのお邸内にあつ

なあと感じた次第です。

さて、私が能楽に親しんだ発端は古く、本中時代の国語教科書に「隅田川」「竹生鳥」など謡曲が収録されており、教科の一つとして手ほどきを受けた記憶があります。又、当時は四国高松藩関係の先生が多く、中学三年の国語担任だった、松平定房先生(史朔先生と号し、伊豫の松平家の筋とか)が能楽の造詣深く、教科の参考にと水道橋の宝生能楽堂や、虎ノ門の華族会館の能楽堂での学生鑑賞能に連れて行って頂いた時の記憶が、私の脳裏のどこかに有ったためかも知れません。

分になりましたね。又、拵席の段差がなだらで、且つ演者との距離及び視線がフラットなので観ていて疲れない、そんな感じの能楽堂でした。

染井能楽堂は、その後、お屋敷内にマンションが建つので舞台は一旦解体され、奇特な方のご配慮で、何れかに保管されておりましたのを、横浜市で、新しい能楽堂が建てられる機会に寄贈され、数年前に横浜の「みなとみらい21」を見下ろす、掃部山公園内に新設された、横浜能楽堂に移築され、歴史の深い能舞台が再び日の目を見ることができました。

私は、完成後早々に横浜能楽堂へ参り、歴史を深く刻んでいる染井の舞台に再会、黒ずんではいますが、昔の面影そのままの姿で再現されておりました。

横浜能楽堂自体は新しいので、舞台以外の部分は真つ新で、又見所も立派な椅子席なので、今は新旧入り混じっている状況です。あと何年～いや何十年経ったら馴染んでくるか

たので、外の騒音は全く聞こえず、閑静な雰囲気の中で、大変気分良く、謡いや仕舞ができました。舞台そのものも由緒ある年代物なので、気品がありました。又、見物席、これは見所(けんしよ)と申しますが、昔のままですから、勿論椅子席ではありません。所謂、畳敷きの拵席なのです。その拵席は、今時の大相撲の、四人座つたらコートも置けないほど、窮屈な拵席とは異なり、ゆったりとした広さがありました。又、木造建築ですが、能楽堂内の採光も十分で、落ち着いた気分で謡曲・仕舞等を演じ又鑑賞できたと、記憶しています。

昨今の、鉄筋建てビルに入っている能楽堂の客席は、大体五百席前後が一般ですが、染井は狭く、二百人も入れたでしょうか。ですから観やすいのです。それにしても、正面のお席に座ると、何だか殿様になったような気



現横浜能楽舞台(旧染井能楽舞台)

坪内逍遙先生と演劇博物館

長崎 一（高三回）

早稲田大学のキャンパス内にひととき変わった建物が存在する。通称演博（えんぱく）と人々呼んでいるが、正式には早稲田大学坪内博士記念演劇博物館という。

坪内博士はご存じのごとく、近代日本文学の先駆者であり、開拓者でもあるが、とくに演劇芸術の向上発展に尽くされ、また早稲田大学創設の恩人であり、文学部の設立者でもある。

演劇博物館は一九二八年（昭和三）、先生の古稀と『シェークスピア全集』全四〇巻の完訳を記念して、各界有志の協賛によって創設されたものである。

ところで坪内先生は、本郷学園にとってもたいへんえにしの深い方でもある。我々学園の在校生、そして卒業生が高らかに歌う本郷学園校歌の作詞者であることは、今更紹介するまでもないことであろう。

私事で誠に恐縮であるが、文学部を卒業した年、当時の演劇博物館館長であった河竹繁俊先生のお力を頂き、館員となることができた。母校の校歌の作詞者であり、芸術文化に多大の功績を残された先生の記念の博物館に就職できたことは、私にとってもたいへん幸せなことであった。

以来三七年余を演劇博物館学芸員として勤務させて頂いたが、坪内先生の資料に接したなかで先生の直筆ではないが「本郷中学校歌」と書かれた冊子を見だし、感激したものである。坪内先生がどのような経緯で本郷の校歌を作られたのであろうか。

「坪内逍遙事典」（一九八六年 平凡社発行 逍遙協会編著）にその経緯が少々ではあるが、記載されている。

『本郷中学校校歌 本郷中学校（本郷高等学校の前身）校歌は、昭和四年（一九一九）三月

八日制定。坪内逍遙作詞、信時潔作曲。「逍遙選集」別五に収録。逍遙の手控帳には「松平頼壽伯の依頼もだがたく、咄嗟に本郷中学校の校歌を作る」とある。以下略……松平は東京専門学校（早稲田大学）邦語法律科の卒業生で、逍遙とは師弟の間柄にあり、大正七年から母校の評議員、維持員を務め、その間理事にも選ばれていた。歌詞は四章から成り、染井の地は江戸時代から植木屋の多いことで知られており、それにちなんで少年を苗木に託し、本郷中学の教育によって大木となり、国家や社会の柱になるようにという念願を内容にしている。』

以上で校歌の誕生がお分かりになったであろうが、昭和四年といえば演劇博物館が開館してまもなくのこと、坪内先生の年譜によると歌詞は三月五日に完成されたことある。先生七十一歳のときであった。

さてここで紙面を頂き、演劇博物館についてご紹介してみたい。以下演博と略称

一般の方がここを訪れると、変わった建物だと思われる。

実はこの建物は一六〇〇年にロンドンの郊外に建てられたシェークスピア劇場のフォーチュン座を模して、坪内先生指導のもとに建築家今井兼次の設計によって作られたもので、正面には張出しの舞台があり、エキゾテリックな雰囲気を持たせている。この舞台ではしばしば演劇が上演されている。

九八年には創立七十周年を迎え、内部がリニューアルされ、館内全体もよりモダンと なっている。

展示室は全部で十室あり、各時代に生れたさまざまな日本の演劇、民俗芸能、舞楽、能楽、歌舞伎などの資料をメインに、シェイクスピア関係の資料も展示されている。

こうした常設展示のほかに企画展示室などでは過去に「杉村春子展」、「島田正吾と新国劇展」、「市川右太衛門旗本退屈男参上」展等、

バラエティに富んだ展覧会が開かれ、好評を博している。

また館内には閲覧室があり、内外の演劇関係図書が常時閲覧でき、学生の卒論制作にも大いに利用されている。

閲覧室は三つの部屋にわかれ、まず和漢書は本館一階にあり、ここでは日本演劇、外国演劇、歌舞伎、映画等あらゆるジャンルの図書、雑誌が見られる。また欧米各国の演劇書シェークスピアに関する洋書は本館向かって左の建物の三階で閲覧できる。

このように紹介してきたが、建物が学校の中にあるということで、一般の方々とはかく遠慮しがちであった。しかし最近では広報関係の充実により、演博の名も広く知られるようになった。

入場は無料、どなたでも観覧でき、閲覧室も学生は勿論だが、どなたでも身分証をお持ちになれば利用できるようになっていた。

ところで演博では坪内先生を顕彰する活動の一貫として、九九年より館内展示解説員を

置くことになった。これはボランティア活動であり、毎週金、土曜の二日間、午後より観覧者のニーズにお応えして二人コンビで館内展示の説明を行っている。

坪内先生記念の博物館ということで長々と紹介させて頂いた。校友の方々も是非ご来館頂きたいものである。

ただしなにも大学構内にあるため入試期間や夏、冬の休みなど閉館している時もあるのです、ご承知願いたい。

演劇博物館電話〇三―五二八六一―八二九

長崎 一 略歴

昭和二六年 本郷高校卒業

三〇年 早稲田大学文学部演劇科卒業

同大学付属機関演劇博物館に学芸員として勤務

五六年 同大学教育学部の講師兼任

演劇博物館を選択定年で退職

以後教育学部講師として勤務

一五年 同学部講師を定年退職

文化祭報告

田中 良一(高二十四回)
本郷学園文化祭テーマは、「男」。今まで、このようなテーマがあったでしょうか…

男子校のテーマとして単純であり、本筋をついているではないですか…さて、今年も同窓会は、文化祭に参加を決めました。内容は例年の如く実施する事で大筋まとめ、八月の理事会で承認を得、九月の臨時運営会で活動分担を決め当日までのタイムスケジュールを作り行動開始。

文化祭参加は今年で四年目となり、内容についても、例年並みと変化はないものの、参加する事で、同窓生来訪と、これから同窓会に入会する予備軍に対するアピールを目的として、継続実施しています。準備は、文化祭一週間前の土曜日、この日は本郷学園中学高校の体育祭です。文化祭準備は同窓会資料室で十三時から十五時の二時間をかけ、展示物の整理を行い文化祭前日にパネルや机の配置等をする事で終了…

体育祭は、同窓会応援席も用意されていますので、文化祭の準備が完了次第、応援席に向かいました。

そして**文化祭前日・当日** 前日の準備も運営会の皆さんが行ってくれたので、当日の準備もスムーズに出来ました。当日の朝九時は大先輩の奥平さん(中十五回)と私(文化祭報告者)で写真、コーヒーとお菓子の準備を終え十時の開催を待つばかり。室内は同窓生のリチャード・バインのサククス演奏が流れ、雰囲気も上々来訪者を迎える準備が整いました。

一日目 これから本郷入学を考えている親子の来訪が目立ちます。また、本郷学園先生達もちらほらと見学をなされました。同窓会ブースには、生徒の来訪が少ない事は例年同じですが、今年は、ご父兄や学校見学の親子が多くコーヒーサービスが繁盛しました。時間帯は十一時から十四時が来訪者のピークでした。巣鴨門にテーマである「男」のゲートとして、グラウンド横の楠木並木の下に出口コーナーが軒を並べて生徒が来訪者に威勢の良い

掛け声をかけていました。

余談ですがこの楠木は報告者(高二十四回)の卒業記念の並木です。(三十一年前植えた楠木で、大木に育ち舗装道路が根っ子で盛り上がるまでに成長しています。)

二日目 本郷学園理事長の来訪、若い同窓生達そしておじいちゃんが、お父さんが本郷を卒業しているお母さん、父母会の皆さんが来訪されました。最終時刻になり、高校初期のバスケット部員や、今日同窓会をされると言う高校六回の皆さんが、集合場所に同窓会ブースを利用され、多く集まって来られました。来年は、もっと文化祭に同期会を開催すれば、同窓会の目的の一つに当たる同期会開催促進になる事でしょう。

最後に学校関係者の皆様、三年九組(この同窓会誌が発行する頃は、卒業して同窓会員です)の皆さん、ご協力有難うございました。

今年も参加しますので、同窓会員の皆様、想いでの本郷に是非来訪あれ…

同期の輪

昭和十一年卒業(中九回生)

本中会の集いの会

十月十四日に中野サンプラザにおいて開催した。毎年一回は集会を計画しており、本年は標記月日において実施した。在京外、他県に現在二十八名おり、参加要請のはがきを出しているが、今回は十名の参加を見た。遠くは富山県在住の小沢氏、三重県から網谷氏、広島県より中村氏も元気な顔を見せた。

昨年は十五、十六名の参加があったが当日都合が悪いとのことで欠席された方もいた。先ず有賀君の開会の挨拶により会が開始され、次に五味会長の挨拶に引き続き本年逝去された、伊藤巖君に対し哀悼の意を示し、黙

祷をささげた。

宴会に入るに際して今回富山県から参加の小沢君が乾杯の音頭をとり会食に入った。会食中には中学時代五年間の思い出を語り合い楽しい一時を過ごした。引き続き各人より近況の説明があった。

会合も十二時から十四時迄の予定であったが十五時迄延長した。遠来の参加者もあるので残念ながら終会とした。最後に網谷君のリードで本郷中学校々歌を合唱し、来年の再会を約束してそれぞれ家路についた。

なお当日の出席者は網谷、有賀、大塚、小沢、五味、佐々木、関口、千葉、藤田、中村の十名であった。

有賀、佐々木 記



やすなこの会

(中十五回)

一九四二年卒業、満六十年を迎えた吾等や
すなこの会は、二〇〇二年十月二十六日、母
校近くの菓鴨・泰平飯店で同期会を開いた。
遠くは神戸在住の宮本君も駆けつけ、二十名
が参集した。

残念なことに幹事役であった佐々木君
が、九月六日に急逝され、寂しきは隠しきれ
なかつたが、故人を偲びつつ、六十年前の思
い出話に感嘆の声も聞かれた。

男性の平均寿命八十七歳に達した事に、よ
くぞ戦中、戦後生き延びてきたものと感謝の
言葉がしきりであった。陰に戦死者のあるこ
とも忘れてはなるまい。

寄せられた欠席者の便りは、弱った足腰、
循環器関係の闘病生活と前向きであり、来年
は是非出席したいと元気のよい言葉も散見え
れた。二十三名の学兄の健康を切に祈って止
まない。

記念写真の八十にならんとする健やかな老



速お姉さんにオーダー。一巡後、再度「追
加!」。静かに楽しく飲んでるマナーの良さ
に感心したり、そのタフネスには全く脱帽
です。さてその五十年のタイムトンネルをく
ぐつてきた、私達の年齢は何と七十六歳で、
寅年か卯年なんです。
かくて名物、魚の干物を土産に帰路に着き
ました。

尚、第六回は、
今年五月に隅田川
の屋形船、という
趣向まで決まって
しまいました。
元気な仲間のス
ナップ写真をご覧
下さい。

高野正美 記

人に拍手を。

吉田幸之輔 記



高六回同期会

平成十四年夏の記録的な猛暑も漸くおさ
まり、おだやかな快い秋日和の九月二十一日
(土)、学校の裏門近くの三菱スポーツセン
ターの二階、パルティールで二年ぶりに同期
会を催した。

何時もの顔ぶれ二十七名が集り、毎回元氣
にご出席の林英夫先生のご挨拶の中で、先生
が二十九才の時の教え子であると伺った時、
私達は改めて月日の流れを痛感した。最後に
全員にて校歌を合唱し又の再会を楽しみつつ
散会した。

次回の幹事役は、川窪国明君にお願いしま
す。彼の腕の見せ所、是非拝見させてくださ
い。長い間幹事役をした松坂忠明は、若い時
の不摂生の為に現在は病弱の為に、今後は
事務局として協力させて頂きますとの事で、
ご連絡もれの人もあるとは思いますが、次の
会には是非ご出席ください。

第四・五回「築桜会」

葛西臨海公園日帰り&

伊東温泉一泊のエネルギー

(中十七回)

私たちのクラス会の村松会長は、同窓会長
も兼ねています。理事諸兄から「十七回生は
何十年とクラス会をやつてなかつたが、やる
となつたら立て続けですな」と冷やかされた
そうですが、全くその通り。二年間で五回の
クラス会です。呆れますね。

昨年六月、第四回は葛西臨海公園へ行き、
続く第五回が町田幹事の世話で、十一月十日
に二十一名参加で伊東温泉一泊が実現した。

当夜、宴会・カラオケの後の二次会は幹事
部屋で続行。何しろ昭和十年代の、五年間の
青春時代を共に送った仲間だから、話は尽き
ること無く(女房や子供は聞いてはくれない
でしょう)。午前様になつてから、やつと各
自の部屋へお引取頂きました。

更に驚きは次の日の朝食時です。「幹事!
お酒?」後で割り勘だからOK」の声で、早



高八回生 第一回同期会

去る十一月九日(土)、午後十二時三十分より、四十六年ぶりに高八回生(昭和三十一年卒業)の同期会が、本郷学園本館の二階会議室で行なわれた。

歳をとると、年々歳々同期の人達が亡くなっていく。それだけに元気に過ごしている友達のことを聞くとうれしい。また、会えばこのうえなく心の良薬となる。

今回は十一人(呼びかけ三十八人)が参加した。大木、大野、奥村、角能、木塚、小室、勅使河原、中野、西田、渡邊(衛)、新澤(米次)の面々。

出席者は、受付で手にした各自の名札をつけ、お互いに顔を見合せ、自然に名前、愛称が飛びかった。会議室は緊張、瞬間の不安から、なごやかなムードに変わった。こうなるとクラスは別々でも皆、全員分け隔てなく想い出に浸り会話がはずんだ。

今回は平成十五年春に、本郷学園の会議室で行なう予定である。



新澤米次 記

高十八回生同期会

平成十四年も例年の如く、十一月に日本教育会館の喜山倶楽部で開催しました。毎回四十名以上の参加者で、今回も四十二

名の出席で盛会でした。

松平理事長が久しぶりで来られ、ご挨拶を頂きました。その折、会の記録をご覧になって、開口一番。

「第三十一回の同期会、おめでとーございませ〜。」

のお言葉に、卒業以来三十一年にもわたって会を開いていることに気付き、改めて、驚いた次第です。長く続く友情に、よき友とよい会の益々の発展を胸に刻みました。

前田 記

山川会

(高二十一回クラス会)

昭和四十四年三月卒業三年三組が、奇しくも三十三年ぶりのクラス会を開くことが出来ました。

残念ながら担任の山川宗彦先生は、一年前にお亡くなりになられており、先生の写真を囲んでの、一周忌の様相となりました。とは言え、虎ノ門のホテルで三十三年ぶりに再会

した十五名のおやし顔は、五分後には懐かしい昨日の友の顔になっていました。たった十五名ですが、同期会に換算すると一〇〇名を越える計算になります。

会を「山川会」と命名して、無事クラス会は終了致しました。

P.S. 望外の立派な記念会誌が、長谷博氏のお陰で出来上がりました。本当に素晴らしい会誌がありとうございますと、頭が下がる思いです。

皆の総意で、記念会誌の名前が「山川会」と命名されました。

二次会では山川先生とぜひお会いしたかったと、涙ながらに訴えた者もいたと聞きます。

楢山隆史 記

バスケット部OB会開催

当学園同窓会の副会長を務められる望月氏(高三回)の呼びかけで、籠球部OBが約五十年振りに再会を果たしたのが、二十世紀最後の年の平成十二年五月、以降毎年五月に会合を続け、その間、縦、横の連絡が取れるに促し参加人数も増えて、十四年度には十六名が会場の三菱養和会内「レストラン・パルティール」に集いました。

永井体育館で、共にボールを追いかけていた青春の日の思い出を語り、お互いの健在を喜び、現況を語り合うには時間が足りず、来年の再会を約して三々五々二次会へと向かいました。

尚、出席者の最長老は広瀬氏、坂野氏の両先輩(高二回)であり、最若年は高十二回と年令的な隔たりにも拘らず、斯様な集まりが持てることは同じ釜の飯の絆の強さであり、ここに運動部の存在意義を感じる次第です。

角能良宣(高八回) 記



平成十四年度定期総会報告

平成十四年六月二十二日午後三時より

於 本郷学園会議室

平成十四年度同窓会定期総会が、六月二十二日(土)午後三時から学園会議室で、司会丹波副会長(高十八回)より開会宣言され、理事七十五名中出席者二十九名十二名の総数三十一名で開催された。

開催にあたり、高橋雄新校長より「文武両道を更に進めて行き、社会に出てでも活躍出来る人を育てて行きたい」と又、池田雅彦副校長から、本校伝統の文武両道の精神と、人の痛みや、悲しみのわかる、優しい心を持った人を、創始者松平頼壽候の建学精神である、スポーツも強く、文もたつ教育理念に向かって、今後も男子校として、力強く進んで行く抱負と、文部科学省指導の、五日制に対する本校の対策や、新校長に変わってからの改革

的教育方針等を、あつく語られたご挨拶を戴く。

総会に入る前に、平成十三年度の物故者に対して、全員起立の上で黙祷が捧げられた。この後、議長選出が行われ、出席者多数の拍手で村松達夫会長(中十七回)が選出された。書記には、栗原廣太郎理事(高六回)が選ばれた。これより議事に入る。

第一号議案、平成十三年度事業報告は、秋元副会長(高七回)より「銀友三十一号二十四頁」参照の上、詳細に説明され、了承された。第二号議案、平成十三年度一般会計報告は、寺田副会長(高二十四回)から「銀友三十一号二十四頁」参照の上、詳細に説明され了承された。

第三号議案、平成十三年度会計監査報告は、見並監事(中十二回)と松坂監事(高六回)により、厳正に検査の結果、適正に処理されていた。との説明があり、了承された。

第四号議案、平成十四年度事業計画では、秋元副会長が、本年度より高一、二、三年生全員に銀友を配布したとの説明があつて、「銀友三十一号二十五頁」に基づく説明で、了承された。

第五号議案、平成十四年度一般会計予算案は、「銀友三十一号二十五頁」に基づく寺田副会長の説明で、了承された。

第六号議案、平成十四年度名簿編集計画案は、望月副会長(高三回)より現在チェック中の回期は、高一、四、七、八、十三、十七で今年度は、高一、十四、三十を目標としている。又、十四年度中に高七、八、二十回の同期会が予定されている。との説明があり、了承された。

第七号議案、平成十四年度銀友編集計画案は、関塚副会長(高二十回)から今回発行部数

は一三、〇五八部で、千部部を高校生全員に配るため計一万四千数百部印刷した。又、投稿は何でも結構であるが「私のライフワーク」をテーマとしたもの等をお願いしたいとの説明があり、了承された。

第八号議案、平成十四年度ホームページ計画案は、田中副会長(高二十四回)より銀友三十一号発行後約千件のアクセスがあつた。ホームページには事業計画にそつたものを載せて行きたい、又ホームページの投稿方法も考えていきたいとの説明があつて、了承された。

第九号議案、文化祭出展計画案は、関塚副会長から「同期会の集まりの場」にしたい、更に会場の準備設営に理事の方々の協力をお願いし、との要請があつて了承された。

第十号議案、その他は、「卒業生に対する記念品」についての質疑があり、同窓会としての支出は、学校側に協力する、と言つた形のものである旨の説明があり、承認された。

第十一号議案、新理事並びに監事改選の件

配付資料二、三頁に記載の候補者が今回の対象者である旨の説明が議長よりあり、承認された。

以上で平成十四年度総会の全議題が、終了した旨の議長報告で閉会した。このあと会場を三菱養和会内、レストランパルティールに移して懇親会とした。

栗原 記(高六回)



学園だより

■平成15年度入試結果

国公立大学は、東北大学(四)、筑波大学(二)、千葉大学(二)、電気通信大学(六)、東京医科歯科大学(一)、東京工業大学(一)など延べ三十九名であり、昨年度から六減である。

私立大学は全体で五百七十三名であり、昨年度より約二割の減少である。早慶上智理科大については、早稲田大学(三十三)、慶応大学(十八)、上智大学(二十八)理科大(三十六)、延べ百十五名と昨年度を少し上回った。いわゆるMARCHE+Gについては、明治大学(四十九)、青山学院大学(十五)、立教大学(二十二)、中央大学(二十七)、法政大学(二十)、学習院大学(十九)、延べ百五十二名で、こちらも昨年度を少し上回った。

■指定校推薦制大学は青山学院大学(理工他)、学習院大学(文・法)、慶応義塾大学(理工)、上智大学(理工他)、中央大学(商・法・総合政策)、東京理科大学(理工・工)、法政大学(工)、早稲田大学(商・理工)、その他合計三十四校合格

■国公立大学合格者三十九名

東北大学、筑波大学、千葉大学、東京医科歯科大学、東京工業大学、横浜市立大学、京都立大学その他

■私立大学合格者五百七十三名

青山学院大学、学習院大学、北里大学、慶応義塾大学、国際基督教大学、上智大学、中央大学、東京農業大学、東京薬科大学、東京理科大学、東洋大学、日本大学、明治大学、立教大学、明治学院大学、法政大学、早稲田大学その他

なお、合格者が重複しているが、その他多数となっている。

■平成14年度(二〇〇二年度)クラブ活動状況

ラグビー部 顧問 大浦一雄・渡辺宣武

新人大会(一部トーナメント) ベスト16、春期大会(インターハイ都予選) 3回戦、全国大会都予選 ベスト8

サッカー部 顧問 阿出川信夫 コーチ 岩野英明

新入戦 地区1位、関東大会都予選1回戦、インターハイ都予選1回戦、全国大会都予選2回戦

陸上競技部 顧問 西川路健児・福島 浩

インターハイ都予選都大会 総合3位、走幅跳1位(木村) 走高跳1位(角山)、4×100mR1位(佐々木、正川、小山、木村)、関東大会 総合4位、走幅跳1位(木村) 走高跳2位(角山)、4×100mR3位(稲毛、正川、小山、木村)、インターハイ 走幅跳4位(木村)、日本ジュニア選手権走幅跳3位(木村)、世界ジュニア選手権出場

「ジヤマイカ」(木村)

ボート部 顧問 小林正男

インターハイ都予選クオドルプル3位 ダブルスカル2位 3位、国体都予選クオドルプル3位 ダブルスカル3位、関東大会出場クオドルプル ダブルスカル

剣道部 顧問 合田吉博・田辺剛人

都春季大会兼関東都予選 ベスト8、インターハイ都予選 団体3位、個人 久々湊・岡田ベスト8、玉竜旗大会出場、第49回関東大会 ベスト16、団体関東ブロック 3位(次鋒、大脇)、団体 3位(次鋒、大脇)。柴田旗・大野杯争奪剣道大会 ベスト8、立教杯剣道大会 ベスト8

水泳部 顧問 三好 修

春季大会総合 3位、都大会総合2位、関東大会総合 3位、インターハイ総合8位、新人大会総合 優勝

スキー部 顧問 沢辺利夫・佐々木隆多
ノルディック関東・全国大会出場

柔道部 顧問 石井秀明・熊野耕二

都学年別支部大会ベスト8(都大会出場)、都高校柔道選手権支部大会ベスト16(都大会出場)、インターハイ都予選支部大会出場

バスケットボール部 顧問 川沼文明・桑原 一郎

春季大会兼関東大会都予選 1回戦、全国大会都予選 1回戦
硬式テニス部 顧問 岩撫義利・中山博志
都大会団体 3回戦、都大会個人3回戦(シングルス) 2回戦(ダブルス)、都大会新入本戦1回戦(シングルス) 2回戦(ダブルス)

卓球部 顧問 山梨英克
インターハイ都予選出場、関東大会都予選出場

硬式野球部 顧問 田中晋・保田啓介 監督
岡田 武

夏季全国大会都予選、秋季大会都予選
フェンシング部 顧問 上村 謙
関東大会出場、団体都予選(三内) 4位、

インターハイ都予選(三内) 4位

バレーボール部 顧問 倉澤幹彦・金子泰晴
第3支部優勝大会 3位、都高校新人大会1次リーグ 1位、2次リーグ 4位

バドミントン部 顧問 西谷英樹・移川真男
インターハイ都予選都大会(個人)、男子ダブルス 1回戦、インターハイ都予選都大会(団体)、Aブロック予選 2回戦

ボウリング部 顧問 三好耕二・斉藤一貴・後藤高弘
全日本高校選手権出場、全日本新入選出場、関東地区選手権出場、全国高校対抗選手権出場

器械体操部 顧問 沢辺利夫
文化祭 アトラクション参加

山岳部 顧問 小澤 稔
高畑山・倉岳山(4月)、八ヶ岳「硫黄岳」(5月)、大菩薩峠・嶺(7月)、剣岳・立山(夏山合宿)、奥多摩・御前山(11月)

平成15年度事業計画

自・平成15年4月1日 至・平成16年3月31日

日	事業計画	日	事業計画
三月二十七日	運営委員会	三月二十七日	中学卒業式
三月十五日	高校卒業式	三月十五日	中学卒業式
二月二十一日	運営委員会	二月二十一日	高校卒業式
二月十七日	理事会・新年会	二月十七日	運営委員会
一月十七日	運営委員会	一月十七日	理事会・新年会
十二月二十日	運営委員会	十二月二十日	運営委員会
十二月十五日	運営委員会	十二月十五日	運営委員会
十月十八日	運営委員会	十月十八日	運営委員会
九月二十七日	学園祭・文化祭	九月二十七日	学園祭・文化祭
九月二十三日	運営委員会	九月二十三日	運営委員会
九月十九日	文化祭出展準備委員会	九月十九日	文化祭出展準備委員会
六月二十一日	定期総会・懇親会	六月二十一日	定期総会・懇親会
五月十七日	運営委員会	五月十七日	運営委員会
四月十九日	理事会・懇親会	四月十九日	理事会・懇親会
四月七日	高校・中学入学式	四月七日	高校・中学入学式

平成14年度事業報告

自・平成14年4月1日 至・平成15年3月31日

日	事業報告	日	事業報告
三月二十日	中学卒業式	三月二十日	中学卒業式
三月十五日	運営委員会	三月十五日	運営委員会
三月五日	高校卒業式	三月五日	高校卒業式
二月十五日	運営委員会	二月十五日	運営委員会
二月十八日	理事会・新年会	二月十八日	理事会・新年会
一月十九日	運営委員会	一月十九日	運営委員会
十二月十六日	運営委員会	十二月十六日	運営委員会
十二月二十一日	運営委員会	十二月二十一日	運営委員会
九月二十二日	学園祭・文化祭	九月二十二日	学園祭・文化祭
九月十四日	文化祭出展準備委員会	九月十四日	文化祭出展準備委員会
九月七日	理事会・懇親会	九月七日	理事会・懇親会
八月三十一日	運営委員会	八月三十一日	運営委員会
七月十三日	運営委員会	七月十三日	運営委員会
六月二十一日	定期総会・懇親会	六月二十一日	定期総会・懇親会
六月一日	銀友三十一号発行	六月一日	銀友三十一号発行
五月十八日	臨時運営委員会	五月十八日	臨時運営委員会
四月二十日	理事会・懇親会	四月二十日	理事会・懇親会
四月六日	本郷高校・中学入学式	四月六日	本郷高校・中学入学式

平成15年度一般会計案

自・平成15年4月1日 至・平成16年3月31日

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	3,241,941	卒業記念品費	200,000
会費	3,000,000	文化祭出展費	40,000
入金	942,000	印刷費(一般)	20,000
名簿編集積立金組入	1,937,371	印刷費(銀友)	1,220,000
受取利息	320	発送費(銀友)	1,050,000
		発送手数料(銀友)	130,000
		通信費(H P含む)	120,000
		名簿管理保守費	240,000
		事務用消耗品	10,000
		会費郵便振替手数料	105,000
		振込手数料	4,000
		予備費	100,000
		次年度繰越金	5,882,632
合計	9,121,632	合計	9,121,632

平成14年度一般会計報告

自・平成14年4月1日 至・平成15年3月31日

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	2,353,249	卒業記念品費	149,600
会費(1,159名)	2,764,000	文化祭出展費	32,605
入会金(360名)	1,080,000	印刷費(一般)	17,400
雑収入	2,345	印刷費(銀友)	1,182,090
受取利息	300	発送費(銀友)	1,022,441
		発送手数料(銀友)	113,331
		通信費(H P含む)	109,440
		名簿管理保守費	232,055
		事務用消耗品	4,995
		会費郵便振替手数料	79,950
		振込手数料	2,046
		雑費	10,000
		次年度繰越金	3,243,941
合計	6,199,894	合計	6,199,894

*** お知らせ ***

同窓会名簿発行取止めについて

かねてより同窓会名簿発行準備の為、各回期毎の名簿を収集し、データベースを作成、異動の連絡があった場合は随時改訂して参りましたが、①住所判明者が全卒業生の半数以下で、且つ回期によっては住所判明者が極めて少なく、名簿の態を成さないこと。②毎年の異動が多く、名簿刊行時すでに内容に相違が出る。③名簿が商業目的に悪用される恐れがあること。等を総合的に判断して、全同窓生の名簿発行は断念する事と致しました。

これに伴い、名簿発行積立金の残額1,937,371円はこれを取り崩し、一般会計に繰り入れる事と致しましたので、ご承知下さい。

尚、各回期の住所判明者の情報は、事務局のデータベースから何時でも取り出す事ができますので、同期会等にご利用下さい。

(以上理事会の議を経ています。)

平成14年度名簿編集積立金明細

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	1,937,344		
受取利息	27		
合計	1,937,371	次年度繰越金	1,937,371
		合計	1,937,371

預金明細

現金	1,135,730	本郷学園同窓会	会長	村松達夫
東京三菱銀行普通預金	2,353,249	本郷学園同窓会	会計	寺田正美
郵便貯金	1,692,333	本郷学園同窓会	監事	松坂忠明
合計	5,181,312	本郷学園同窓会	監事	高田隆義

本郷学園同窓会会費納入者一覽

平成十五年三月三十一日現在

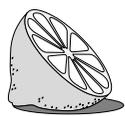
中1回	荒牧 鍛造、加藤 一夫、神鳥 稷英、寒阿江仁弘	中11回	青野 廉、市川 雄一、上田 義雄、小川 邦夫	中16回	中西 弘毅、中村 美登、名和 秀雄、根本 卓光
中2回	成田 啓五、野本 泰	太田 芳藏、海津 力、角田 栄三、鎌田 勝雄	黒川 興文、近藤 要、高橋 耕一、永田 忠哉	野村 秀二、萩原 友郎、畑 定、松本 八郎	
中3回	安藤 正二、青柳 志郎、泉津井 玄、忍田 太郎	中野 武正、長岡啓之、高妻 義繁、長谷 和夫	山崎 治憲、八杉 繁	宮本 幸雄、山口 富三、吉松 茂弥、吉田幸之輔	
中4回	伊藤 英治、池谷 欽一、宇田川義雄、亀甲 勲	新井 洗、今井田 貢、石原 豊英、上村 和夫	楠本善一郎、後藤 嘉徳、小島 義之、坂口 甫	渡辺 大乗、松田 光博	
中5回	井上 久男、石井 千里、敏夫、小林 裕	中村 秀之、堀 一郎、松岡 和光、前田 晴久	見並 力、山田 英彌、由井洋四郎、吉田 正吾	伊藤 篤行、大沢 欽一、大津 泰三、加瀬 量次	
中6回	廣瀬 武次	和氣 秀夫、小松 昭、高貫 繕晴	阿部敏一郎、井上 明照、高井 三郎、石原 清助	菊地 宏、木村 康夫、小水 井 暹、白井 明	
中7回	伊神大四郎、大和 慎人、小出 一夫、小林 清	太田 恭二、久保 秀明、黒島 四朗、小森 為郎	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	高橋 樟守、田中 光男、田中 凡夫、近澤 勝利	
中8回	佐原雄次郎、橋本 七郎、秀島 辰弥、堀江 勇治	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	永田 三郎、中村 允、村上 忠之、山口 一弘	野尻 利祐、羽根孝太郎、種代 幸雄、古内 正禮	
中9回	山本 秀明、四谷 輝久	山口 明、山本 昌雄	岩村 龍明、石川 芳正、尾立 維久、佐藤 三良	藤田 洋一、和田 節、鶴見 俊一	
中10回	田中 昇、村岡 豊	柴崎甲子夫、鈴木 一郎、高 一郎、高野 睦	多賀 一郎、田幡 徹、西村 博、菱山 勇次	阿出川昭治、秋田 禮一、伊藤 三郎、井桁八三郎	
中11回	合場 信次、網谷 英二、有賀 活郎、有村 純臣	藤井 繁太、藤井 稔、森本 三郎、宮尾 勝丸	安達 敬喜、新井 文一、入江 幸夫、奥平 保正	乙部 邦章、小川 清、小倉 高規、村田 雅通	
中12回	鶴木 真夫、瀬戸 正弘、園部 三郎、谷崎 丈夫	萩原 久雄、大河原由雄、大久保雄二、河原 燦	勝 敬二、栗原 重雄、工藤 幸雄、近藤 義久	大野 肇、尾前 広、加賀野井清作、垣 喜一郎	
中13回	竹田 亨、長嶺金次郎、湯原 豁	兒玉 孝、高合 邦夫、佐々木象一、杉田 義久	鈴木 利一、高沢 俊夫、土屋 健人、中山 甲一	亀岡 周、佐藤 元徳、斉田 貢一、澤木 一	
中14回	浅井 美雄、稲木 實、石坂 岩雄、川崎 昌夫	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	宮崎 和哉、南 敬、森本 三郎、宮尾 勝丸	下村多気夫、新谷 卓司、清水 英夫、島田 威	
中15回	鶴木 真夫、瀬戸 正弘、園部 三郎、谷崎 丈夫	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	安達 敬喜、新井 文一、入江 幸夫、奥平 保正	関谷 昭、高野 正美、田中 章治、村田 稔	
中16回	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	安達 敬喜、新井 文一、入江 幸夫、奥平 保正	田中 裕一、千葉 孝男、角折 幸輝、塚本 直人	
中17回	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	安達 敬喜、新井 文一、入江 幸夫、奥平 保正	土屋 二郎、寺口有喜公、中山 茂、橋本 直人	
中18回	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	安達 敬喜、新井 文一、入江 幸夫、奥平 保正	星野 実、保坂 忠夫、益田 泰彦、前田 昌弘	
中19回	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	安達 敬喜、新井 文一、入江 幸夫、奥平 保正	町田 滋、水田 裕昭、村松 達夫、村田 耕夫	
中20回	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	鈴木 和男、橋 正道、高橋 正、寺門 務	安達 敬喜、新井 文一、入江 幸夫、奥平 保正	森 宏、数田 幸一、蔵 清平、鈴木 隆	

中1回	大島 曹司、加藤 浩正、蒲生 勇三、金子佐多美	市川 保、菊入喜三郎	小林 金則、小林 秀行、佐々木啓之、佐瀬 友貞
中2回	影山 清、菊地 照夫、北村廣三郎、北堀 幸雄	阿知波 健、井上 宏之、市橋 光雄、板倉 厚	篠 喜三郎、齋越 信、鈴木惣一郎、関 計一郎
中3回	栗山 春雄、駒井 嘉直、後藤 良一、佐々木一昭	大下 晃、古門 敏郎、小林 國雄、新澤 良孝	高木 桂三、谷澤 文雄、津久田愛之助、中山 寿夫
中4回	志田 芳久、清水 正美、菅野 英夫、菅野 武司	古澤 秀信、星野 昌弘、持田 耕一、横澤 重恒	中村 義一、中里 盛次、根立 光夫、平川 明雄
中5回	鈴木 充、鈴木 卓三、瀬川 昌男、高橋 高	井筒 千秋、越田 和夫、須田 光夫、高田 政雄	丸橋 修、松坂 忠明、渡辺 松本、幸司
中6回	高橋 一夫、高橋 三郎、高橋 操六、高橋 直林	田島 達策、中原 豪彦、福沢 昇、江森 俊男	前田 明男、三谷 哲男、渡辺 勝、市川錦次郎
中7回	田中 健一、千葉兼太郎、土屋 恭一、藤堂 正彰	相川 厚、佐治 栄一、種田 邦彦、外内 悦雄	久保田喜喜、風間 幹雄
中8回	富山 栄、豊崎 益夫、友安 昭治、中山 正	堀井善次郎	秋元 幹夫、有田 常義、井島佳二郎、武田 之孝
中9回	仲摩 邦夫、長谷 鍾三、二木 清夫、野本 昭	岡村 孝彦、小倉 雅文、坂野 重一、櫻井 泰	平田 満男、山内 周、矢田 明二
中10回	榎垣 順次、細井 孝、菩提寺悦郎、間野 芳夫	西條 哲、稲田 稔、清水真太郎、豊嶋 敬司	新澤 米次、勅使河原宏記、藤巻 健三、南谷 修
中11回	松永 昭二、松廣 翠、松田 裕、松島 寿夫	中村 嘉宏、西島 成一、羽生 銛佑、浜野 清隆	吉村 規史、渡邊 茂明
中12回	松本 純治、前田 和男、森田 昭平、水原 奎一	秋入 貞雄、廣瀬 六郎	芥川 正義、田辺 博昭、田中 好明、西江 正晴
中13回	山田 桂三、武藤 昇、正徳、森本 肇	宮内 政雄、碩男、石川 達夫、植松 隆吉	比企 定憲
中14回	山田 山治、山本 吉田 重雄、渡部 豊二	遠藤 亘良、奥平 博一、大槻 一雄、大部 淳夫	青木 弘三、岡本 信也、小川 敏、亀井 俊一
中15回	渡辺 信夫	北見 尹、志野原津夫、合田 平、小嶋 大吾	上岡 光男、小島 友宏、田中 秀明、津原 巖
中16回	阿出川義男、新井 忠彦、石井 博夫、岡田 貢一	高橋 正光、千田 昇、中島正次郎、長崎 秀雄	塚原 静夫、中河 秀行、茂出木義雄、山崎 昇
中17回	桶川 芳雄、乙坂 保、大久保武司、大野 健弘	根本 強、平子 浅雄、前田 善男、光安 伸夫	山崎 高
中18回	貝塚 明雄、菅 文男、亀山 謙治、柏原 英一	望月 敏郎、山口 洋司、山内 英夫、吉田 孝光	會田 光雄、太田 善夫、小池 弘祐、花田宗一郎
中19回	菊田 勇、佐藤 輝義、重永 政夫、玉川 昭	岩瀬 直成、向井 利男、八嶋 政臣、渡辺 武男	市倉 洋一、大槻 勝英、熊本 宏治、曾原 道和
中20回	高橋 實、高橋 昭彌、竹本 三男、西村 努	佐々木直綱、廣瀬 澄	竹村 義教、松崎 方也
中21回	保谷 六郎、増田 速水、山崎 達司、山本 巖	井上 清、市村 近、鹿野 伸二、片桐幸一郎	阿出川信夫、安達 義道、相川 清、明石 安邦
中22回	市川 恒雄、大屋 忠、大塚 康夫、金澤 一朗	島崎 雄司、関口 叔帆、染谷 登、谷川 洋明	園田 勲、方波見 茂、越路 往輝、斎藤 毅
中23回	倉田桂二郎、島田 正夫、田島利男、対馬 誠也	中林 忠昭、横田文一郎	中村 久、渡辺 則綱
中24回	橋岡 俊雄、土肥 隆、中島敬太郎、羽田 健児	田中 登、伊藤洋之助、稲垣 泰輔、石井 延彦	新田 安雄、斎藤 真、杉山 雅一、高井 英行
中25回	鶴本 公成、藤林 晃、皆川 敬次、三浦 秀雄	池内 春俊、奥村 茂、小形 祐一、小椋 一	高田 隆義、峰岸 桂介
中26回	山下 保次、山中 伸介、山田 英爾、吉田 秀世	勝野 恵之、川窪 国明、栗原廣太郎、後藤 順夫	池田 明、小野寺良雄、賀澤 光浩

高18回 小松 貞栄、榊原 康夫、芥田与四郎、砂泊 光彦
 丹波信三郎、田原 克人、根本 輝久、宮沢 正喜
 高19回 秋葉 和秀、石原 崇光、遠田 守利、尾村 俊明
 河中 仁、中村 博、沼尻 卓、長谷川 実
 長谷部晴人、武藤 昇、吉川 昭二、吉倉 幸信
 高20回 我妻 光久、大野 英治、小林 友展、佐々木正紀
 酒井 孝一、関塚 正治、戸張 友晴、野水 国一
 堀部 雅美、町田 準一、矢代 順一、良川 眞
 高21回 岩越 政美、菊地 正美、杉山 利博、鈴木 斉
 中里 勝男、西 正規、早川 盛男、檜山 隆史
 高22回 遠藤 達哉、大惠 淑行、木下 寛明、鈴木 正治
 瀬賀 春雄、中野 二郎
 高23回 池野 直樹、小国 信男、太田 治、高橋 博
 仲原 辰男、原 重光、曲谷 良夫、飛田 茂
 若狹 涉次
 高24回 石原 涉、大堀久二男、掛川 敏行、進藤 久幸
 田中 良一、寺田 正美、中村 敬司、野田 悠二
 日高 詳介、松島 和己、村上 信夫
 高25回 栗山 孝治、佐野 養、坂井 成一、莊子 隆之
 高澤 秀幸、田島 秀行、千野 邦雄、長沢 弘幸
 松崎 敏弘、山口 登、吉田 徳義、渡辺 文雄
 高26回 伊藤 正彦、稲田 俊和、岩崎 一、柴 安弘
 杉浦 昌彦、末永 克彦、立花 英一、立入 健司
 益子 弘毅、庭野 毅、平野 隆之、松平 善明
 大和 英樹
 高27回 安部 昌治、秋山 喜弥、稲垣 登、岩崎 充晃
 岡村 桂一、河野 信義、長瀬弘一郎、並木 嗣男
 原田 俊幸
 高38回 佐藤 秀行、住吉 一泰、石本 厚順、片桐 智明
 高37回 高橋 二哉、土田 賢一、濱田 透、山口 和彦
 横川 高樹、城 和夫、矢島 俊之、矢野 克行
 針谷太一郎、大塚 潤、吉本 光博、楠本 健輔
 高36回 田邊 賢一、松本 圭一、比護 良次
 高35回 諸石 貴生、岩崎 弥一、丸橋 英正、黒澤 正夫
 茂呂 孝元、染谷 敏昭、江見聡一郎、本莊 恭一
 野口 貴洋、増岡 武宏、山下 晋一
 川端下徳之、山田 晴一、田中 正二、五十嵐裕太
 有坂 直大、齋藤 卓也、杉本 淳、鈴木 均
 高34回 石川 淳、金子 泰久、塚原 利晶、平澤 淳
 渡邊 哲寛
 高33回 齋藤 卓、鈴木 康悦、高橋 秀明、滝本 学
 西田 洋一、根本 弘幸、福島 浩、別所 篤
 高32回 磯田 浩之、岩田 実、小口 邦夫、小山雄紀裕
 高31回 石坪 英貴、佐藤 修一、富水 浩伸、土村 弘己
 藤波 文有、中村 貢司、山畑 邦裕、吉田 法夫
 高30回 上荒 敬司、原田 雅之、榎本 隆廣
 横山 鉄夫、渡辺 嘉伸
 高29回 中村 茂樹、藤井 政夫、松本 俊一、森 雅彦
 島 幸男、菅野 弘一、玉置 健、田中 和男
 高28回 井口 隆、岡野 智彦、金子 一清、上谷内純一
 黒沢 邦夫、杉山 豊、菅原 義則、田中 実
 中井 雄一、堀江 至久、松原 祐行、山本 和弘
 安住 高弘、飯泉 彰裕、大久保 実、小林 清美
 高27回 鳥 幸男、菅野 弘一、玉置 健、田中 和男
 中村 茂樹、藤井 政夫、松本 俊一、森 雅彦

高46回 柴崎 直樹、金子 隆、鈴木 健一、小川健太郎
 北澤 卓弥、谷口正太郎、山田 洋一、涌井 嘉人
 荒井 昌之、則松 計征、須泊光一郎、渡邊 信貴
 高47回 河村 英俊、秀野 泰隆、高田 祐輔、柳瀬 崇博
 北野 知行、須原 秀一、今氏 照樹、島村 正夫
 高48回 高井 智任、高橋 圭祐、島根 宏幸、橋本 直人
 池田 斉、稲生雄一郎、徳永 理利、中村 織雄
 川島 昌弘、増田 健次、宮本 一弘、柳沼 良
 高49回 町田 健、堀 洋平、増田 望、立川 嘉久
 林 誠吾、荒井竜太郎、安井 督、上野 光信
 小澤 正、坂上 聡志、渡邊 龍秋、中濱 健晴
 近藤 大介、千種 伸宜、山田 元之、波部慎吉郎
 高50回 大森 健史、小林 悟、下関 秀文、中元 毅
 島村 有希、矢部 誠、乾 嘉宏、清水 貴寛
 網島 宗介、古川 浩司、瀧川 道生、田邊 誠
 八木岡重樹、浅野 良太、柳川 忠之、財津 宜史
 高51回 天野 秀忠、竹田 周司、岡田 拓、梶野 貴経
 白石 佑一、高田 共宏、佐藤 英明、須賀 裕哉
 西野 新平、沼尾 盛史、萩原 孝明、阿部 哲也
 中野 賢、西山 佳宏、松岡 将介、福田 智則
 新井 亮輔、中田 孝宏、根本 周平、増田 幸久
 溝淵 亮、荒川 桂輔、滝澤 一晴、行木 達朗
 若杉 文寛、中澤 利幸、橋爪 雄志、服部 大祐
 濱野 和明、堀越 大谷 賢志、乙丸 貴史
 坂口 大介、染谷 快典、丹羽 大輔、皆川 裕司
 高52回 吉野 一哉、若西 良介、植村 典和、大塚久仁郎
 井上健太郎、今田 卓郎、岩井 謙、倉持 裕之
 嶋田 亮輔、関澤 泰明、高橋 智久、高遠 宏幸
 田村 真也、成瀬 隼人、西尾 浩、長谷川智洋
 及川 雄太、塩畑 太一、浜田 栄二、鈴木 耕平
 千田 崇平、市川 晋也、上田雄邦人、藤本 泰宏
 櫻田 啓太、相馬 利夫、竹内 潤一、野村 高峰
 花上 武史、上坂 理、加藤 隆之、坂田 憲和
 平野 尚司、落合 祐之、鈴木 良昌、篠原 洋次
 関根 佑輔、船古 崇徳、赤松 篤、朝川 仁
 猪越 正直、大塚 邦紀、関口 悠、伊達 智洋
 馬場 修介、北田 康一郎
 高53回 渡邊 昌一、今井 秀星、熊木 淳一、田中 勲
 長橋 智久、上田 竜太、作左部健司、藤田 豊
 江川 勝久、栗山 孝幸、中井 秀昌、永島 広隆
 福森 洋輔、山浦 太一、吉村 和樹、荒井 大樹
 奥山 雄太、齋藤 秀雄、鈴木 穰、長南 基
 大塚 憲、小島 将敬、鶴岡 廣哉、安達 広幸
 寛 真一、佐々木大輔、中村 旭、日谷 亮
 村上 幸彦、足利 英城、福田 章吾、市村 理人
 内原 嘉昭、海老 絳彰、後藤 泰治、舩谷 泰成
 丸山 大輔、三村 純一、深山 敬大、山崎 雅弘
 佐藤 達哉、高波 佑介
 栗野 晴夫、齋藤 慧、佐々木英行、宮本 広幸
 栗野 耕平、石澤 泰三、杉岡 卓哉
 平山 智貴、柳 宗明、山浦 侑大、山下 泰之
 高54回 吉澤順一朗、小谷 泰介、杉山 洋樹、高橋 祐磨
 中島 文博、吉田 繁幸、加藤 靖彦、岸 武史
 堤坂 和昭、渡邊 悠介、大森 秀昭、清水 圭
 辰巳 裕紀、横山 佳之、渡辺 俊介、飯嶋 学
 石渡 晶史、海外原 剛、久保 隆之、関口 亮
 武田 真吾、海老 寛之、白土 峰大、須賀田真嶺
 一本木利英、加藤 佑典、亀井 慎哉、北村 徳宏
 小泉 孝人、佐藤 寛之、白土 峰大、須賀田真嶺
 土橋 篤仁、富田 悠允、北條 弘明、堀越 周
 相川 和基、河相 匡彦、鎌田 亨、木下 乾一
 柴 雄二、中村 和寛、長尾隆大朗、梅壽 政徳
 松内 則秀 森 祐真、青木 聡、福田 浩司
 植田 篤一、川 伸太郎、荒木 剛、上鈴木 祐輔
 種岡 篤志、机 仲太郎、荒木 剛、上鈴木 祐輔
 岸 優太、戸澤信太郎、堀江 翔一、芦川 浩夫
 小泉 信吾、土屋 貴宏、中川 洋一、樋口 諒
 正木 健彦、森本 隆士

高18回 小松 貞栄、榊原 康夫、芥田与四郎、砂泊 光彦
 丹波信三郎、田原 克人、根本 輝久、宮沢 正喜
 高19回 秋葉 和秀、石原 崇光、遠田 守利、尾村 俊明
 河中 仁、中村 博、沼尻 卓、長谷川 実
 長谷部晴人、武藤 昇、吉川 昭二、吉倉 幸信
 高20回 我妻 光久、大野 英治、小林 友展、佐々木正紀
 酒井 孝一、関塚 正治、戸張 友晴、野水 国一
 堀部 雅美、町田 準一、矢代 順一、良川 眞
 高21回 岩越 政美、菊地 正美、杉山 利博、鈴木 斉
 中里 勝男、西 正規、早川 盛男、檜山 隆史
 高22回 遠藤 達哉、大惠 淑行、木下 寛明、鈴木 正治
 瀬賀 春雄、中野 二郎
 高23回 池野 直樹、小国 信男、太田 治、高橋 博
 仲原 辰男、原 重光、曲谷 良夫、飛田 茂
 若狹 涉次
 高24回 石原 涉、大堀久二男、掛川 敏行、進藤 久幸
 田中 良一、寺田 正美、中村 敬司、野田 悠二
 日高 詳介、松島 和己、村上 信夫
 高25回 栗山 孝治、佐野 養、坂井 成一、莊子 隆之
 高澤 秀幸、田島 秀行、千野 邦雄、長沢 弘幸
 松崎 敏弘、山口 登、吉田 徳義、渡辺 文雄
 高26回 伊藤 正彦、稲田 俊和、岩崎 一、柴 安弘
 杉浦 昌彦、末永 克彦、立花 英一、立入 健司
 益子 弘毅、庭野 毅、平野 隆之、松平 善明
 大和 英樹
 高27回 安部 昌治、秋山 喜弥、稲垣 登、岩崎 充晃
 岡村 桂一、河野 信義、長瀬弘一郎、並木 嗣男
 原田 俊幸
 高38回 佐藤 秀行、住吉 一泰、石本 厚順、片桐 智明
 高37回 高橋 二哉、土田 賢一、濱田 透、山口 和彦
 横川 高樹、城 和夫、矢島 俊之、矢野 克行
 針谷太一郎、大塚 潤、吉本 光博、楠本 健輔
 高36回 田邊 賢一、松本 圭一、比護 良次
 高35回 諸石 貴生、岩崎 弥一、丸橋 英正、黒澤 正夫
 茂呂 孝元、染谷 敏昭、江見聡一郎、本莊 恭一
 野口 貴洋、増岡 武宏、山下 晋一
 川端下徳之、山田 晴一、田中 正二、五十嵐裕太
 有坂 直大、齋藤 卓也、杉本 淳、鈴木 均
 高34回 石川 淳、金子 泰久、塚原 利晶、平澤 淳
 渡邊 哲寛
 高33回 齋藤 卓、鈴木 康悦、高橋 秀明、滝本 学
 西田 洋一、根本 弘幸、福島 浩、別所 篤
 高32回 磯田 浩之、岩田 実、小口 邦夫、小山雄紀裕
 高31回 石坪 英貴、佐藤 修一、富水 浩伸、土村 弘己
 藤波 文有、中村 貢司、山畑 邦裕、吉田 法夫
 高30回 上荒 敬司、原田 雅之、榎本 隆廣
 横山 鉄夫、渡辺 嘉伸
 高29回 中村 茂樹、藤井 政夫、松本 俊一、森 雅彦
 島 幸男、菅野 弘一、玉置 健、田中 和男
 高28回 井口 隆、岡野 智彦、金子 一清、上谷内純一
 黒沢 邦夫、杉山 豊、菅原 義則、田中 実
 中井 雄一、堀江 至久、松原 祐行、山本 和弘
 安住 高弘、飯泉 彰裕、大久保 実、小林 清美
 高27回 鳥 幸男、菅野 弘一、玉置 健、田中 和男
 中村 茂樹、藤井 政夫、松本 俊一、森 雅彦



本郷学園同窓会会則

第一章 名称及び位置

《名称》

第一条 本会は本郷学園同窓会と称す。

《位置》

第二条 本会は事務所を東京都豊島区駒込四丁目十一番一号本郷学園内に置く。

第二章 目的

《目的》

第三条 本会は会員相互の親睦を厚くし母校の発展を図るを以て目的とする。

《事業》

第四条 本会は前条の目的を達するために次の事業を行う。

会員の親睦会の開催、会誌の発刊、母校後援事業、名簿の調整と発刊、ホームページの運営、慶弔等。

第三章 組織・役員

《会員》

第五条 本会は次の会員を以て組織する。

会員は、母校卒業生及び卒業生待遇者並びに中途退学者で会員の紹介により理事会の承認を得た者とする。

《役員》

第六条 本会には次の役員を置く。

名誉会長 一名、顧問 若干名、相談役 若干名、
会長 一名、副会長 若干名、
理事（各任期一乃至三名） 監事 二名

《役員選出》

第七条 前条の役員は次の方法により定める。

名誉会長は本郷学園理事長を推薦する。

顧問は本郷学園名誉校長及び校長並びに会長経験者を推薦する。

相談役は副会長・理事・監事の経験者で会長の委嘱により推薦する。

会長は理事会において理事の互選により選出する。

副会長は理事中より会長の委嘱によつて定める。

理事は、各任期毎に選出し総会の承認を得るものとする。但し選出のない任期からの理事は一名を会長が指名委嘱し総会の承認を得るものとする。

監事は、会員中より選出する。
会長・理事・監事は選出後の最初の総会の承認を得るものとする。

《役員の仕事》

第八条 役員は次の職務を行う。

会長は会を代表して会務を総括執行する。

副会長は会長を補佐し会長事故あるときは副会長間において定める順位により会長事務を代行する。

理事は、理事会に出席して、本会の運営に参画する。

監事は会計を監査する。

顧問・相談役は会長の要請ある時は随時出席して意見を述べる。

《役員任期》

第九条 役員任期は三年とする。

第四章 会議

《会議》

第十条 本会の行う会議は、総会、理事会、運営委員会とする。

会議の議長は、会長が指名する。

《総会》

第十一条 総会は本会の最高議決機関とする。

定期総会は毎年一回原則として母校で行い会務報告、役員承認、会則改正その他本会に関する重要事項を議決し且親睦会を兼ねるものとする。

会長は理事会の議決により臨時に総会を招集することができる。

《理事会》

第十二条 理事会は理事を以て構成し理事の過半数の請求、もしくは会長の要請により開催し本会に関する一般事項を審議する。

《運営委員会》

第十三条 運営委員会は、副会長及び本会の事業を担当する理事で構成し、会長の招集によつて開催、本会の運営にあたる。
運営委員会に副会長中より会長の委嘱によつて事務局長を一名おく。

第五章 事業及び議決

《事業の遂行》

第十四条 理事は担務を定めて会誌の発刊、企画、会計、庶務その他の事業を遂行する。

第十五条

理事会において立案された本会の事業は総会の議決を経るものとする。但し、急を要する場合は理事会において処理する

ものとし、次回の総会において承認を得るものとする。

《議決》

第十六条 会員は総会において一様に発言権・議決権を有し、総会、理事会の議決は出席者の過半数をもつて決す。

可否同数の場合は議長が決める。

第六章 会計

《事業年度》

第十七条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌三月三十一日に終わる。

《会計》

第十八条 本会の経費及び事業資金は入会金及び普通会員の年会費並びに寄付金その他を以てこれに充当する。

一旦納入した金品は一切返還しない。

第十九条 本会の収支決算は毎年総会に於いてこれを報告、承認を得るものとする。

第二十条 会員は年会費を一口金貳千円として一口以上を毎年納付するものとする。

卒業時の入会金は参千円とする。

第七章

第二十一条 本会則は総会において出席会員の三分

の二以上の賛成がなければこれを改正することを得ず。

付則

本会則は平成十三年六月十六日より施行する。

以上



訃報

謹んでご冥福をお祈り致します

中一 加藤 英夫、神鳥 稜亮、寒阿江仁弘
 中二 田代 康虎
 中四 今井田 豊、宇田川義雄、佐藤 正道
 中五 時吉 卓哉
 中六 井上 二郎、小林 裕、小山 敏夫
 中七 小島 政世、橋本 七郎
 中九 村岡 豊
 中十 佐藤 喜正
 中十一 内藤 和彦、松本 太郎
 中十二 小林 義雄、戸塚 貞治、藤井 正
 中十三 塚田 六郎、見並 力、吉田 孝
 中十四 島本 廣泉、高 一郎
 中十五 安達 敬喜、大津 英夫、佐々木象一
 名和 秀雄
 中十六 関 隆範、増山 善明、増田 富一
 中十七 重松 成二、松丸 久夫
 中十八 倉本 鉄司、小山 寿
 中二十一 藤村 省三
 高六 東 重信
 高二十 北山 治男、鷺塚 寛
 高二十二 松本 省三
 高二十三 内藤 英弥

高二十九 佐藤 寿裕
 高三十五 新田 禎樹
 高三十八 大田 幸一
 高三十九 高橋 秀訓
 高四十三 鶴岡 令嗣

同窓会にご連絡のあった方のみ掲載しております

~~~~~

### 追悼文

佐々木象一君を偲んで

奥平保正(中十五回)  
 それは、思いもかけぬことでした。そしてこの世は儚いものだと知らされました。亡くなる三日前、石切橋バス停近くの喫茶店で、「やすなこの会」(中十五回同期会)の最終の打ち合わせをし、「では、明日挨拶の主文を届けよう」ということで別れました。翌日家に届けてくれました。ワープロを切り貼りして印刷し、渡辺兄の労作のアドレスを貼り、急ぎ発送したのです。

そして、翌日の夕刻、佐々木夫人から「主人が亡くなりました」

とのお知らせを受けました。

学兄佐々木君とは、平成八年の同期会で幹事の指名を受けてからのお付き合いです。九年、十年と二期にわたり、小日向に伺ったり、巣鴨で飲んだりした。ときには、夫人と一緒にの事もありました。そしてまた、幹事を二人でやることになり、準備をしていた矢先のことでした。

彼は文部省のお役人で、結構堅苦しい事もあったが、ひとがよかった。神戸の宮本君の所へ遊びに行こうなどと誘ってくれたりしました。平成十一年には鈴木君と連れ立って琴平に行きました。石段はきついいいって、宿に残っていたのが思い出されます。身体には気を使っていたようでした。去年でしたか、駅の階段は苦手だなどといっていました。声がかすれてきて電話は遠慮していました。小太りの恰幅の良い彼からは想像もつきませんでした。



在りし日の故佐々木君(左から1番目)、宮本、奥平、鈴木

## 事務局よりのお願い

日頃は同窓会活動にご協力戴き有り難うございます。

さて、同窓生の死亡・住所その他の変更の情報は、会費納入用紙に記載されるか、インターネットのホームページに書き込まれるか、または左記要領にてご連絡下さるようお願い致します。

必須事項は、氏名、卒年、回期です。

### ◎葉書の場合

送付先 〒一七〇一〇〇〇三

東京都豊島区駒込四丁目十一番一号

本郷学園内 本郷学園同窓会宛

### ◎ファックスの場合

〇三三二九一七〇〇〇七

尚、電話によるご連絡では誤記等が発生しやすいので、ご遠慮下さるようお願い致します。

本郷学園同窓会事務局

## 編集後記

銀友三十二号をお届けします。本誌の性格とページ数の制約から、編集に特色を出す事がなかなか困難ですが、本号は文化教養に重点を置いた編集を心がけました。

インタビュ記事は能の囃子方で大鼓の能手、人間国宝の亀井氏(高十二回)をとりあげましたが、今後も各界で活躍している本郷OBをとりあげ、紹介していきたいと思えます。これこれの分野でこういう人がいる、と言うような情報を、是非編集部まで、お知らせ下さる様ご協力をお願いします。また、インタビュに当たるインタビュアーを募集しています。インタビュを通じ、幅広い知識が得られ、人間形成に大変役立つ興味深い仕事ですので、若い方に是非手を挙げてもらいたいのです。

また、毎回お願いしていますが、同窓の皆さんからの寄稿をお待ちしています。本郷学園に関わる内容でなくて一向かまいませんので、会員の皆さんの協力をお願いして、編集後記と致します。

銀友編集委員一同

南



本年度の文化祭は  
9月27、28日です。  
卒業生のご来場を  
お待ちしております。

平成15年6月1日発行

**本郷学園同窓会**

発行責任者 村松 達夫

〒170-0003 東京都豊島区駒込 4-11-1 本郷学園内  
同窓会へのお問合せはFAXにてお受けします。

FAX：03-3917-0007